

道義報国

御恩徳

私どもは、宿世の因縁によりまして、皇国日本に生をうけさせて頂くことが出来、その上、昭和の聖代に生きさせて頂き、しか有史以来の一大事、興亜の聖業の成就される今に遇わせていただき、更に、樞原の宮柱いよいよゆるぎなき皇紀二千六百年の春を迎えさせて頂いたことは、何という重ね重ねの幸なことでありましょう。身のおきどころなく、有難く尊くうれしく思わせて頂くことであります。この時、上御一人におかせられては、玉体いよく御健かにおはしまして、竹の園生弥栄に茂らせたまうことは、申すも畏き極みであります。もとより八紘一字の聖業も、至尊の御聖徳に基することであります。兎の毛、羊の毛ほども、添えることの出来ない、金おう無欠の国体と御一体にましますところの、御聖徳のみ光の中に、興亜の民は撰められております。大地にひれ伏してこの御恩徳を拝謝することであります。

去る年も来る年も

私どもはお念仏の中に旧年を送り、お念仏の中に新しい年を迎えさせて頂きます。私の周囲は「何とといういい年を送らせて頂くことであろう、何という有難い年を迎えさせて頂くことであろう」という声によつて埋められております。これ、しかしながら、お念仏の徳であります。大信海の光明の輝きであります。そして誰も彼も御奉公の嬉しさに精みに精んでおります。昭和十四年はいいい年であった。有難い年であった。その喜びのままに新しい年を迎えます。

しかるに、もし昭和十四年はまったくつまらない年であった、来年はいいい年だろう、来年は大いにやる。そうした人はそれこそ、「来年は来年はとて暮れにけり。」一生、生きさせて頂くことの醍醐味を知らずして、この世をいたずらに空費するであります。ましよう。

現前の一念に充されきつて生きる身にして頂いた者は、旧年が有難い年であったが故に、新年もまた有難い年なのであります。

闇黒の家

真実に生きさせて頂く道は「有り難うございます」という感謝と歓喜の中からのみ開いて来ます。魂の奥の奥に暗い闇があつて、押せば愚痴、突けば愚痴、愚痴ばかりが出ていたのでは、いかに形ばかりは道に生き、善いことをしているようでも、決して真に道を生きているものではありません。家の中に闇があれば、家中のものが一つになれないで、することが死んでおります。

しかるに、もし家の中に消えぬ光が点されていて、誰も彼もが感謝して生き抜くならば、心の底から力が溢れて、することが生きることがあります。親爺は欲と二人づれで働きぬき、婆さんは、長い年月、冷たかった親爺に対する愚痴不平をくり返し、息子は家を外に飲み歩き、嫁は、来てから何年帯一本買つてくれないと、子供を抱い

て泣き言を並べる。こうした家庭に何がよい年だらう、めでたい新年であらう。そして、時々嫁が形だけ国防婦人の襷をかけて出て行つたとて、何で銃後の奉公だらう。

この非常時、形こそ変われ、こうした問題の家が、団体が、社会が多すぎる、あまりに多すぎる。このじめじめした家を一軒でも日本国内から少くすること！無形の爆弾よ、この愚悪の家庭に落ちよ。至徳の爆弾の的よ、この家であれ、光明の焼夷弾よ、この愚痴の社会を焼け。久遠劫来の我執我慢のトーチカこの家にあり、八万四千の悪魔の軍勢この私の城による。

一線より帰つた勇士がこの家の様に泣くあり、大陸の賊をほろぼすは難く、家の内の匪賊を滅すは、それよりも難し。香煙ゆらぐ遺骨の前、上より賜る年金をめぐつて、親と嫁との醜い闘争。涙する遺骨、戦場の勇士必ずしも家庭の勇士に非ず、影膳すえた親御を何故に苦しめるぞ。ああ、何故に、頭を日本国土の大地につけて、大御心の廣大を仰がざる。しかも、今、大非常時ではないか。

帰依

ここにおいて最第一の問題は帰依の意であります。帰依の意とは、大乘仏教の真精神であります。徳を徳として仰ぎ、法を法として仰ぎ、その法に絶対随順して生きる菩薩道の意であります。法に絶対帰依して生きさせて頂く念仏の世界であります。そうしてかかる絶対帰依の世界は、我らに何を与えるであろうか。

その第一は不滅の光であります。即ち真実の智慧であります。その二は深い内観自証であります。その三は慶大なる歡びであります。その四は真の力であります。2
その五は恩徳報謝の生活であります。これを一に帰すれば、道であり、あるいは徳であります。又、不退の信念であります。

国家の上には、総親和、総努力、一億一心、百万一心、等々の国民の生くべき道が標出されています。一方にこの標語を仰ぎながら眼を現実に注ぎます。

あるところに勤務している一人の女性は泣きながら私に訴えます。幾十円かの年未賞与と昇給の辞令を置いて、

「先生私は、今のところをやめてもいいでしょうか。とても勤まりません。仕事が山ほどありますので夕方遅くまで働くと、皆さんからさんざいじめられます。しないと上から叱られます。私の賞与が多かつたとて、昨日も今日も男の方までが一緒になつて、聞くに堪えない悪口雑言でいじめられます。私はどうしたらいいのでございましょう。お念仏のない世界の冷たさが身にしみます。」

こうした社会よ、この女の勤める世界だけであつてくれ。しかし、私の耳には、さまざま世界のこうした反国家的な、反道義的な、暗黒界の声が、一方に超大非常時の声と共に聞えて来ます。

こうした世界のすべてにどうして声が届きましよう。そうした世界をどうかするといふより、そうした世界に生きぬく人、一人がほしい。そこに欲しいのは何をもつても消えぬ光ではないか。どんなことが外と内とに起ろうとも、静かに内に帰りうる内的生活の樹立ではないか。誰もどうすることも出来ない歡喜ではないか。いかなる中をも生き得る力ではないか。一貫不動の生活ではないか。

もしそれが欲しいならば、大法に帰依して生きるべきであります。

智慧の光

世にも哀れなるものは智慧の眼の欠けているものでありましょう。それはちょうど肉眼の盲いたる人の如くであります。しかし肉の眼は失われた人であつてもなお世の中の尊き存在となつてゐる人があります。肉の眼の失われたことよりも、心の眼の盲いてゐることは、それよりもなお哀れであります。

しかるに世の人はそうは考えていないようであります。それ故に、多くの人は、自らを泥溝の中に棄てて敢て自らを救い上げようとしません。眼の見えざるかぎり泥溝の中から出ようとはしない。哀れというはこのことでもあります。煩惱の泥沼の中で力まかせにはびこつて、人を苦しめるも哀れであれば、悪に虐げられて泣くもまた哀れであります。

眼のない限り道を得ぬことは同一であります。仏教では、恐るべき狼でも助かつたとは言わないし、哀れなる小羊でも救われたとは言わない。ただ大法に帰依して信心の智慧を獲た者を希有人と讃えられ、真の仏弟子と称せられ、廣大勝解者と呼ばれます。信心の智慧を成就した時、その泥沼のただ中に、白道はあらわれて来ます。大法のみが、智慧の光をその胸中に点して、人を道の行者たらしめるのであります。

七百年の古、日本の国土はいわゆる承元の法難で渦巻きました。当時のあらゆる文化機関は総動員して、吉水の教団の上に迫害の大鉄槌を下しました。そして法然聖人は土佐へ、親鸞聖人は越後へ、流罪になりました。大きな矛盾、大変な間違いが今日も毎日くり返されるのが人生であります。この大きな矛盾が肩にのつた聖人は、淋しい配流のわび住居でどうされたでありましょう。恐らくこの時が聖人御一生の一番悲しい時でありましょう。人は一代の間には、必ず、一切を引きち切つてしまいたいような、せつば詰まつたところに立つことがあります。その時です。如何に生きるかはその時です。そのせつば詰まつた時にも、そこに開いて来たものは念仏道の光であります。

「抑又大師聖人源空もし流刑に処せられたまはずば我亦配所に赴かんや。もしわれ配所に赴かずんば、何によつてか辺鄙の群類を化せん、是れなほ師教の恩致なり。」北国の雪の中に、念仏しつつ、この矛盾、この一切衆生の犯せる大矛盾を「これなお師のみ教えの御恩徳でございます」と背負いきられた聖人の御心事に思い至つた時、念仏の子等の胸には、自然に本仏のみ光の摂取を憶念し、師教の高恩をしのんで、一切の問題は雲散霧消することあります。如来の智慧光は、不断に無碍に我らが胸中を照したもうてあります。これ、智慧の念仏であり、信心の智慧であります。

智慧のみが我らを一心に唯一絶対の大道に安住せしめたものであります。これを本願一乗の大智海と言われるのであります。よしや身は如何に卑賤であらうとも、貧苦にあらうとも、永遠の道にあるものは幸であります。

内観のゆとり

人を悪とし、己を善しとするは、愚痴の心の常であります。この愚痴の心に、世間の荒波押し寄せるや、現われて来るものは、せつぱ詰まった、ゆとりのない、苦しい胸であります。取り返しのつかないことを言ったり、しでかしたり、他日後悔の淵に泣かねばならない種を播くのもこの時であります。如来の大慈悲に摂取された子の胸にも、寒さは寒く、辛さは辛い。しかし、如来に向かつて開かれたる信心の智慧は、我を静かに内につれ帰らずにはおきません。

世を呪うかわりに、愚禿親鸞と諦観されたのは御流罪の日でありました。「地獄は一定すみかぞかし」一切を自己において見、一切を合掌の中に受け取る子は、暗にある群生の運命を自己において発見して、罪悪生死の凡夫と内観します。その時、その手は大地につかれてあり、その頭は御恩の前に下げられています。人はその時、不思議に荷物の軽きを知ります。大悲の光懐に摂取されてある温かさを知ります。安住の境はここにのみあります。

真のよろこびと力

生々とした生活はよろこびから生れる。歓びのある生活のみが生々としている。であるから人はみな喜びを求める。しかるに求めて得ず、尋ねて得ず、得られぬが故にいよいよ探す。探し求めてもそれが見当ちがいで、ますます真の喜びを得ることが出来ない。それが一切衆生の真相であります。

しかるに我ら念仏の子は、十人寄れば十人、百人集まれば百人、皆ことごとく、同様に、

「合掌、南無阿弥陀仏。先生、有難うございました。本当に有難うございました。うれしうございます。私にはこれだけの言葉しか書けません。この度は、このつまらない私をお導き下さいまして、本当に喜んでおります。ここに來てからも、一日として一時として心の晴れた日はございません。何だか胸の奥に、心の底に閉されたものがあつて、何を見ても、何で心を晴そうとしても、どうにもならない私でした。……それから今日まで悶々の日を過して、働いていても心が暗くて致し方ない私でした。……この度の講習会に出席させて頂きまして、身にあまる幸福、何と言つてよいやら有難くて嬉しくてただただ感激いたすのみでございます。……」

この手紙の文が、あの暗い顔をして業苦にやつれていた人の言葉であらうかと思われるくらいである。

真の喜びは、真の力と共である。大法への帰依は真の喜びと力との本源であります。

道義報国

巧みなる言葉を使いつつ、言を左右にして、その貪欲、我執、嫉妬、逆悪、勝手気儘、横着、傲慢、邪見、虚仮の日暮しを続ける。何と言つても、それでは忠良なる国民と言ふことは出来ずまい。

世には、宗教はなくとも己は忠良なる国民であると言う人もあります。私もその昔はそう思っていました。しかし、私にとっては、実にそれは我が身知らずのお恥しい

無智なる高慢でありました。無道義の黒闇に沈んでいることを知らなかったのでありました。

今日、日本に真に必要なものは何でありましょう。それはまず第一に国民の道義報国でありましょう。如何に上に立つ方が声をからして叫ばれても、国民が道義報国の精神なく、炭一表づつでも、米一表づつでも、買いだめをするならば、ただちにゆゆしき問題をひき起します。我らは、興亜の大業は民族最大の使命であると共に至難の一大事、と聞いております。紀元二千六百年は、道義報国の国民的自覚が、いよいよ発揮せられることによつて、奉祝せられねばならぬことを思いつつ、念仏の子の使命を痛感するものであります。